

なったが、キエフを発つ前日に彼から、「もし入国査証の印鑑が無いためにモスクワ行きの飛行機に乗れなかったら、列車に乗せるから大丈夫ですよ。」といわれた時には不法出国をするようで情けない気持ちであった。結果的にはなぜか問題なく目的の飛行機に乗ることができた。初めての海外渡航であり、飛行機に乗ったことさえ無かった私にとってこれも1つの貴重な体験となった。

なお、閉会式において、今回と同様な形式の電磁流体プロセスに関する国際会議を1995年に開催する予定であることがKolesnichenko教授により告知された。

最後に、本会議への出席にあたり、日本鉄鋼協会より第18回日向方学術振興交付金による御援助をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

## ICOMAT-92 に出席して

津 崎 兼 彰

京都大学 工学部

1992年7月20日から24日まで米国カリフォルニア州モンレー市で開催された International Conference on Martensitic Transformation (ICOMAT-92) に参加する機会を得た。会議は、モンレー市のはずれにある緑に囲まれたホテル内の会議専用の建物で行われた。参加者のほとんどは同ホテルに宿泊し会議場内の一会場です食をともにしたため、発表会場以外でも参加者と接する機会が多く、意見交換や私的交流など参加者どうしのコミュニケーションが活発な楽しい会議であった。

ICOMAT は 1976 年に神戸において第 1 回 (JIMIS-1) が開催されてから、今回で 7 回目となる。筆者にとっては、1982 年のベルギー、1986 年の奈良に続いて 3 回目の出席であった。今回は、開催地が有名な観光地であったためか、300 件をこえる発表申し込みがあり運営委員会はプログラムづくりに大変苦労されたと聞いた。このため、招待講演と基調講演を除いて二会場を用いたパラレル・セッションで口頭発表が行われ、ポスター発表については昼食後の時間や Coffee Break を利用して討論を行うという少々きゅうくつな形で会議が進められた。運営委員会議長である Wayman 先生の話によると、実際の発表数は 165 件の口頭発表と 165 件のポスター発表の合計 330 件にのぼり、参加者総数も 21 ヶ国から 247 名を数え、ともに過去最高ということであった。

参加者の数を国別で見ると、米国 83 名、日本 53 名、この後フランス 18 名、オーストラリア 11 名とつづき、開催国である米国を除くと日本からの参加者が最も多かった。さらに、8 件の基調講演の内 3 件が日本の

研究者によってなされ、この分野で日本が重要な地位を占めていることをあらためて知った。これも、先年亡くなられた西山善次先生および本会議の記念講演 (Conference Lecture) をなさった清水謙一先生をはじめとする諸先生方の御努力があったからこそである。若輩の一研究者である筆者としては、何が出来るわけでもないが、これら先達の労を汚さぬよう努力・研究せねばと感じた次第である。

会議の内容は、17 にのぼったセッション数からもわかるように多岐にわたり、筆者には十分にフォローすることができなかつた。しかし、Cohen 先生の格調ある講演や Kelly 先生の迫力にあふれる発表などを存分に聞くことができ、自らのポテンシャルをあげるには十分であった。筆者自身は、鋼のベイナイト変態の機構に関する発表を行ったが、Christian 先生、Edmonds 先生、Krauss 先生など斯界の第一人者を前に発表し討論できた喜びは、この会議に参加しなければ得られない感激であった。

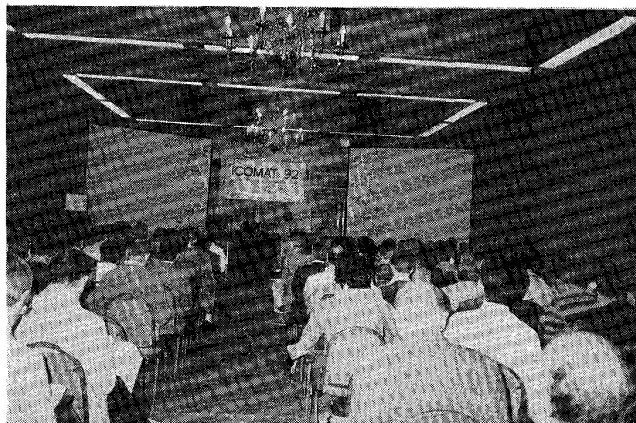


写真 1 発表会場の風景  
(初日ということもあり、ほぼ満席である)



写真 2 Banquet での佐藤先生と Olson 教授のジャムセッション  
(なぜか日の丸が掲げられていなかった)

国際会議には excursion がつきものであるが、これも観光地のメリットを生かして充実したものであった。世界的に有名なモンレー水族館を見学したり、風光明媚な 17 マイルドライブを楽しんだりした。また、各国の出席者がお国自慢の歌や踊りを披露することで、すっかり名物となった Banquet では、初めに佐藤進一先生の尺八と Olson 教授(米国)のトランペットによるオリジナル曲やジャムセッションが披露され拍手喝采であった。歌や踊りと和やかに進行する会場の中において、世界各国の友人と語りながら本会議に出席できた喜びを感じることができた。

よく、国内での春秋の会議を国体に、国際会議をオリンピックにたとえることがある。国際会議が、世界一流の研究者の存在を目の当たりにし自身の力と位置をはかることが出来る場であり、そして何よりお祭りであることからのたとえであろう。今回の ICOMAT もオリンピックとして良く組織された会議であった。次回は 1995 年スイスのローザンヌ市で開催されることが、会議中に決定された、世話好きで心暖かい Gotthardt 教授が議長を務められることになっており必ずや素晴らしい会議となるであろう。ただ、あまりに発表件数が多くならず適切な規模での開催になればと願っている。しかし、自分自身は是非とも参加したいわけで複雑な気持ちである。

最後に、本会議出席に際して日本鉄鋼協会から第 17 回日向方学術振興交付金をいただいたことを付記し感謝致します。

## 第 7 回 チタニウム国際会議に参加して

飴山 恵  
立命館大学 理工学部

1992 年 6 月 28 日～7 月 2 日の間、米国のカリフォルニア州サンディエゴで「Seventh World Conference on Titanium」が開催され、筆者もこの会議に参加する機会を得たのでその印象について報告する。

開催地のサンディエゴは、カリフォルニアの南端に近くメキシコ国境まで電車でおよそ 30 分程度の所があり、街中のそこそこにスペインあるいはメキシコ調の、白壁にオレンジ色の瓦葺きの家々が並ぶ、陽光にあふれたとても雰囲気の良い都市である。会議のちょっと前まで、ヨットレースのアメリカズカップがここで開催されて日本でも随分話題になっていたが、それほど人に溢れているといった感じはしなかった。冬の間や春先にはおそらく避寒地として賑わっていたのであろうが、1989 年の粉末冶金の国際会議も当地で 6 月に開催されていた

ことを思うと、案外この時期はシーズンオフなのかも知れない。このチタニウムの国際会議が開催されたのはヨットハーバーも備えた立派なリゾートホテルで(そういえば粉末冶金のときもこの同じホテルであった)、チタニウムにかかわる盛りだくさんの講演だけでなく、アメリカの高級リゾートの雰囲気もたっぴりと味わうことができた。歓迎パーティやレセプションは、米国的な陽気な BBQ パーティーであったり、ショーがあつたりで、充実した会議というだけでなく、会議そのものを明るく楽しいものにしようという配慮がいたるところに見受けられた。

さて、会議には 24 ヶ国から 700 名近い参加者があり、講演件数は 12 セッションで 460 余件と非常に大きな規模の会議であった。巨大な航空産業を抱える米国からの参加者が大半を占め、発表講演件数も全体の約 6 割と多かったのは当然としても、参加者数をその国あるいはその国の産業界のチタニウムへの関心の高さとして仮に評価するとすれば、米国に次いで、日本(参加者の約 11%)、UK (8%)、フランス(6%)、ドイツ(5%)、旧ソ連(3%)、イタリア(3%)、中国(2%)、カナダ(2%)といった順に参加者数が多く、とりわけ日本、欧州各国のチタニウムに対する関心の高さが目立った。

講演内容では、TiAl などの金属間化合物に関するものが全体の約 20% を占め、金属間化合物に対する急激な関心の高まりを感じさせた。他に、 $(\alpha + \beta)$  合金に関するものが約 21%、 $\beta$  型合金が約 15%、 $\alpha$  型合金が約 10%、pure-Ti が約 3%、その他 30% といった割合であった。セッションの内容では、「non-Aerospace Application」というものが登場し、その内の半数が米国からの講演であった。このようなセッションの登場からも冷戦後の米国の研究方向の変化を伺わせる。また、米国と日本の研究の対象について比較すると、米国は精錬分野が少なく後工程に関するものが中心であるのに対し、日本は sponge-Ti の製造で一步進んでいるだけでなく、加工熱処理や金属間化合物に関する研究など守備範囲は広いようで、どちらかという日本の方が分野ではバランスが取れているといった印象を受けた。今回の会議の Student Poster Competition における京大の岡部徹氏の入賞からも察せられるように、日本の大学、産業界のチタニウム研究のレベルには世界に誇れるものがある。しかしながら、米国のこれまでのチタニウム研究の蓄積にそう簡単に追いつけるものではなく、今後、国際的なつながりの中で効果的に相互の研究が進むことを期待したい。

次回のチタニウム国際会議の開催地はレセプションパーティーの場で発表されたが、これまでの 4 年周期から変わって 3 年後に UK で開催されることになった。このところの Ti 系金属間化合物研究の盛り上がりなど、研究のテンポの早まりからすれば 3 年先でも遅いくらいかも知れない。おそらく、今回以上に活発な研究発表が期待できるであろう。